

会場：オホーツクドーム 日程：2017. 2. 18～19

監督：菅原則幸 コーチ：藤本 哉、高橋博泰

はじめに

オホーツクドームに着くまでの間、地吹雪にみまわれ視界が悪く、路面もツルツル状態で予定より若干遅れて到着しました。

到着早々、ユニフォームに着替えドームのアリーナに入り、ポジションを発表しチームテーマを確認、作戦ボードを使って、フォーメーションやチームテーマに沿った取り組みを指示しました。

トレセンの遠征が初めての選手も多く、かなり緊張している上にすべるピッチで選手たちは苦戦する状況で試合がはじまりました。

チームテーマ

チームテーマは、根室トレセンU-12全体のテーマである、「ボールを奪う！ボールを失わない！ゴールを奪う！」です。

3・4年生年代では、チームテーマを共有し全員で戦術に取り組むということは、少し難しいことと考えています。

理解に対する個人差が大きいことと、所属チームでの取り組みの違い、トレセンでの8人制サッカーの経験の少なさなどが理由です。

しかし、難しいことにチャレンジすることはトレセンの活動では重要で、選手の成長にかかすことができないことと考えています。

「全員でボールを奪い、全員の協力でボールを失わずに、全員でゴールを目指す」という、全員が同じ意識でプレーすることがサッカーで大切なことであり、その中で個人の能力だけでも相手を打ち破るプレーができることもサッカーであること、そして、その判断と選択を自分自身で行うことができるスポーツであり、その楽しさをこの年代の選手に感じ取ってほしいと思っています。

チームテーマに沿った中で、4年生に対し、できるだけシンプルで全員が取り組めるものに絞って、多くの要求をしないように注意しながら、選手の理解度をみながらそれぞれの試合に臨みました。

「観ること！観ておくこと！」があまり習慣化されていない根室の4年生に、単に「ボール、ゴール、相手、味方、スペース」を観ることを伝えても、観ることの意味が理解できないため、具体的な目標を設定し、観ておくことが次のプレーに活かせるよう限定したものとしました。

テーマとプレー

守備では、ポジションごとに「観なくてはいけない味方」を設定し、さらに「ボールとマークの同一視」を徹底することで、味方と相手の位置に応じた、チャレンジ・カバーとインターセプトができるポジションニ

ングがとれるように考えました。

インターセプトの意識が高まってきたところで、最初に設定した「観るもの」に加え、相手ボール保持者とパスの受け手の「コミュニケーションを観る」、相手ボール保持者の「体の向きやボールの位置」をみてポジショニングを変えることを指示しました。

攻撃では、3-3-1のディフェンシブなフォーメーションのため、トップ選手をターゲットにしたシンプルな縦攻撃を全員で行うこととし、トップ選手と相手GKの間にスペースがない場合は、サイドからの攻撃をすることを2つ目の優先順位としました。

全員がトップの選手を狙う戦術は、ボール保持者と受け手の1対1のコミュニケーションの上に成り立つため、これも「観ること」の習慣化ができていない選手たちには、ちょうど良い目標設定であったと思います。トップをシンプルに狙う意識共有は徹底して指示しましたが、両サイドからの攻撃は選手たちの自主性にまかせることにしました。

監督・コーチとも、もう少し攻めのバリエーションを増やしたという気持ちを抑えながらのベンチワークとなりました。

2日間をとおして！

前後半20分（10-10）の試合で全員が途中交代し出場のため、初日の4試合と練習試合の2試合、2日目の3試合、併せて9試合で一番長くプレーした選手でも2日間で90分でした。

普段やり慣れないポジションを与えられた選手が多いなかで、チームテーマとチームテーマに沿った、選手個々の課題を持ってピッチに立ち、課題に取り組むプレーをするという面では、十分にその意識が芽生え、成果があったと思います。

簡単な戦術とすることで、チームの戦術を選手全員がやり遂げようとし、全員でサッカーをやることの大切さと楽しさを感じ取ってくれたと思います。また、指導ポイントのずれをつくらない指導者間の意識あわせも、今回参加の指導者3名のなかで、うまくコミュニケーションがとれていたと思います。

自分の課題に沿ったイメージどおりのプレーができず、消化不良となった選手もいたようですが、消化不良ということは、逆にやり遂げなければならないことを理解してピッチに立っていたということですので、「考えてサッカーをする。考えながらサッカーをする。」ことの成長につながったのではと思います。

最後に・・・！

普段からコミュニケーション能力を高めることを選手に要求してきました。

試合中も片方向の声かけにならないようにし、ミーティングでも選手同士及び指導者が会話形式で反省、改善、課題設定を行う方法で取り組みました。

発言は、単語や2語文程度は禁止で、必ず構文形式（「だれが、何を、どのようにする」さらにその理由という方法）で発言し、それに対話形式で返答することとしました。

意外と上の学年よりも相手の発言を理解して話しをすることができていたことに驚きましたが、固まってしまっ、話し出すまでに時間がかかってしまう選手も多くいました。

たぶん、この選手たちが大学受験をするころには学力点とコミュニケーション能力、プレゼン能力が伴っ

た選考となっていることと思いますし、サッカーではコミュニケーションが非常に重要ですので、単位チームでも、いろいろなコミュニケーションプログラムを取り入れていってほしいと考えます。

試合結果 (前後半で全員入れ替え。)

1日目

V S 釧路 A 0-2 (0-2、0-0)

V S 網走 B 2-0 (2-0、0-0)

V S 釧路 B 2-2 (1-1、1-1)

V S 十勝 A 3-2 (0-2、3-0)

交流試合

V S 釧路 A 0-0 (0-0、0-0)

V S 十勝 B 4-4 (3-1、1-3)

2日目

V S 網走 A 1 - 1 (0-1、1-0)

V S 釧路 B 2 - 1 (1-1、1-0)

V S 十勝 B 1 - 3 (1-1、0-2)

大会結果 3勝2敗2分

※試合数調整のため同チームの対戦あり順位無し

交流試合 2分